地域研究　Vol.41　No. 2　pp.14～22
2001－3　　ISSN 0389-6641

明治期における海水浴場の成立に関する一考察*

中　山　正　樹

Ⅰ　はじめに

わが国の夏の代表的な行楽である海水浴は，幕末から明治初期にかけて西欧からもたらされた海水浴論にもとづくものである．海水浴場はこの海水浴の普及にともなって全国の海浜に成立し，いくつかは近代的な海浜リゾートの形成に大きな役割を果たした．それだけに海水浴や海水浴場は湘南などの海浜リゾートに関する研究のなかでしばしば論及されているほか，水泳史の一部として海水浴を論じたものや，入浴・浴場史のなかで伝統的な潮湯治に言及したものなどがある．なかでも注目されるのが小口千明（1985）の「日本における海水浴受容と明治期の海水浴」と，安島博幸・十代田朗（1991）の『日本別荘史ノート』である．前者は海水浴論を中心としたわが国の海水浴の創始にかかわる研究であり，後者は別荘史・リゾート計画史を論じるなかで小口の研究成果をも参照しつつ，海浜別荘や海浜リゾートの成立等に論及したものである．しかし海水浴場自体を主対象とする研究は少ない．理由はその強い季節性と片手間的な事業イメージにあるように思われる．

本研究は東京－大磯間の海水浴場の成立と背景に関する考察を意図するものであるが，本稿はその前段階として海水浴場の草創にかかわる一般的な背景分析等を試み，併せて当該地域の海水浴場に関する一考察を行おうとするものである．

研究には既往の研究論文や国・自治体等の公刊物，居留外国人等に関する記録類などを用いたが，海水浴場研究の現状からガイドブックや雑誌，新聞等を含む一般の出版物の活用も不可欠であった．このため，一部の文献等の資料としての的確性が問題となろうが，とりあえずこれまでに入手しえた諸文献等を資料として考察することにした．

Ⅱ　海水浴と海水浴場

1．水浴目的の海水浴場と水泳目的の海水浴場

アラン・コルバン著『浜辺の誕生』（福井和美訳，1991）によれば，海水浴は，18世紀のイギリス医学界を中心にして効用が再認識されるにいたった冷水浴（浸水療法）の一形態で，特に婦人や老人など冷水浴を施しにくい人々を対象にした海水療法として推奨され，温泉療法に代わる新療法として注目されるようになったようである．したがって海水浴場は海水療法を施すための保健・医療施設であったが，海水浴が行楽へと変質するのを受けて，行楽施設の一つとして普及していった．このような普及過程はわが国の海水浴場にもあてはまるとみてよい．

海水浴の基本的な行動は主として水泳（遊泳）と水浴（海水に浸る，海水との戯れ・海浜の風土に遊ぶ＝療養・保養を含む）に分けられよう．水泳は技術を必要としスポーツ的であるが，水浴は誰にでもできる遊戯的な行動である．両行動は常に共存していたと思われるが，海水浴の起源や普及過程からみて，水浴目的と水泳目的の２種類の海水浴場が存在したと考えてもよいであろう．この目的の違いは施設などのありよう

［キーワード］1 海水浴　2 海水浴場　3 明治時代　4 京浜地域　5 湘南海岸

*本稿は2000年度立正地理学会研究発表大会で発表した内容を加筆修正し，改題して再構成したものである．

にも影響をあたえたと思われる．

2．海水浴場のかたち

海水浴場といえば砂浜の海水浴場を思いおこす．しかし砂浜以外の海水浴場も存在しており，その海岸の状況によって海水浴場のかたちや利用目的が異なってくる．また海岸の地形は自然の営力のみならず人為によっても変化するため，同じ海岸でも時代によって海水浴場のかたちに変化を生じることがある．以下にその一例を示す．

① 砂浜の海水浴場（通常考えられる海水浴場．例：湘南海岸など）

② 礫浜ないしは磯浜の海水浴場（ごく小さな砂浜がある場合も含む．海水浴場というよりも水泳場．例：山が海に迫った入り海や岬のかげなど）

③ 護岸越しの海水浴場（護岸を有する遠浅の海．干潮時には干潟になる海岸もある．例：かつての東京の海水浴場）

④ 港の構内などに指定された水泳場（例：横浜の外国人が設けたフランス波止場沖の海水浴場）

⑤ 遠泳コース（例：熱海－初島間）

⑥ 人工海浜を利用した海水浴場（復旧したり新たに造成した砂浜を利用した海水浴場．例：横浜市金沢の海の公園）

⑦ その他（例：海水温浴，海水プールなど）

これらのうち②～⑤はスポーツ的な水泳（遊泳）場といったほうがよく，今日では海水浴場としての利用が認められないケースもあると思われる．⑥の人工海浜は国・自治体等によって造成されるケースが多く，公的な海浜公園としての利用が図られることになるであろう．したがってその利用計画のなかに海水浴がどう位置づけられるかが注目点となる．⑦に例示した海水温浴は温めた海水中に入るもので，かつては盛んに行われたようである．この点についてはⅢ・Ⅳ章でふれることにする．

Ⅲ　わが国の海水浴場の成立と社会的背景

1．海水浴場の成立の時期

18世紀中頃のイギリスで誕生した海水浴がヨーロッパ大陸各地に広まったのは，続発した戦争が終息に向かった19世紀半ば以降のことである．

その海水浴に関する情報をわが国にもたらしたのは長崎のオランダ商館や，1857年に創設された長崎の医学伝習所であったと思われる．しかし海水浴が実際に行われるようになったのは，1858年の日米修好通商条約等によって設けられた神奈川（横浜）や兵庫（神戸）などの外国人居留地の海岸で，欧米人が泳ぎはじめてからのことであるといってよい．

わが国の代表的な海水浴場である大磯海水浴場が創設されたのは1885年であった．この時期，ヨーロッパ大陸では海浜リゾートの開発が活発に行われていた．フランスでは従来の大西洋側にかわって地中海沿岸でのリゾート開発が進み，バカンスとは縁遠いパリの一般市民も，リゾート・ライフにならった水泳や郊外旅行をセーヌ河畔で楽しんでいた（山田登世子，1998）．こうしたヨーロッパの動向はおよそ１ヶ月の期間を要して日本にも届けられた．その頃の日本は，体位の向上，虚弱体質や脚気などの生活習慣病の克服，結核やコレラなどといった伝染病対策のために，西洋伝来の衛生や食生活・運動などに関する新知識の普及を急いでいた．海水浴がそのような新知識の一つであったことは夏目漱石の『吾輩は猫である』がよく物語っている．

第１表はわが国における海水浴場草創期の話題について，大磯海水浴場が開かれるまでの足どりをたどったものである．これによると，横浜に外国人が経営する海水浴場が登場してから日本人が海水浴場を開設しはじめるまでに，15年ないし20年ほどの期間を要したことになる．

第１表　海水浴場草創期の内外人の海水浴動向

西暦	事　　項
1865	横浜の『ヘラルド』紙が港内に海水浴ボート設置の広告を掲載.
1866	この頃，横浜在留者ワツソンが横浜富岡で海水浴.
1869	木戸孝允がオランダ人医師の勧めで大阪天保山下において海水浴.
1870	『ファー・イースト』に横浜本牧で海水浴との記事.
1871	スロイスが金沢藩に海水浴場の開設を献策.
1872	フランス人プスケが片瀬海岸で海水浴.
1875	この頃，横浜富岡が外国人の海水浴場であったとの記録あり.
1876	フランス人エミール・ギメが片瀬海岸で海水浴.
	宣教師のゴーブルやフルベッキが横浜富岡に来る.
1877	モースらが調査のため訪れた江の島で海水浴.
	松本順が石川桜所に神戸舞子浜での海水浴治療を指示.
1878	ヘボンらが富岡の海岸で水質検査，海水浴場に最適と評価.
1879	ベルツ，ナウマンらが片瀬海岸を海水浴場の適地として推薦.
	松本順が大磯で鈴木柳斉に海水治療を施す.
1880	ベルツが鍋島侯の子供の片瀬での海水浴を計画.
	函館病院で子宮病治療に海水浴を試す.
	大阪鎮台の兵士が明石海岸で脚気治療のための海水浴.
1881	内務省衛生局が「海水浴説」を公表.
	オランダ人医師ハイデンが須磨海岸に初の海水浴場を開く.
1882	長与専斉の勧めで伊勢二見浦に海水浴場が誕生.
	後藤新平が愛知県大野の海岸に海水浴場を開設.
	この頃，山下一帯で海水浴をする日本人が増加.
1883	この頃，暁星学校の日本人を含む教職員が片瀬海岸で水泳.
1884	海水浴養生場海宝楼が武州富岡（横浜市）の八幡前に開業.
	横浜海岸通りに海水浴場が開業（海水浴温泉ともいう）.
1885	松本順が大磯町照ヶ崎に海水浴場を開設.

（『横浜もののはじめ考』，『江の島海水浴場』，『日本別荘史ノート』，『新聞集成明治編年史』，『ベルツの日記』，『醒めた炎』，『磯のかおり』，『ヨコハマ』，『二見町史』，『明治世相編年辞典』，『明治事物起源』により作成）

２．海水浴場成立の社会的背景

海水浴がこれまで直接海に入るという体験をしたことのない人々のあいだに急速に普及した背景には，何らかの社会的な力が働いていたと考えられる．そうした推進力の一端として以下のような事柄をあげることができよう．

１）日本人医師の強い関心

明治期に活躍した大官・知識人には，幕末，蘭学や洋学を学んだ医師が多い．この医師たちが長崎で海水浴論に出会った可能性が高い．『磯のかおり』によれば，医学伝習所の責任者であった松本良順（のち順）は，海水浴に関する説明をじかに師のポンペに求めているという（大磯町観光課，1984）．

一方，ヨーロッパの海水浴場を実際に訪れた記録は，1871年から73年にかけて米欧諸国を巡歴した岩倉遣外使節団の英国見聞記などに見ることができる．こうして醸成された海水浴への強い関心が，後のわが国での普及努力につながったと思われる．

２）保健目的での導入努力

内務省衛生局が「海水浴説」を公表したのが1881年であった．これがわが国初の海水浴論ではないかといわれ，海水浴という言葉もこれによるものとみられている．この衛生局の中心的な役割を担ったのが松本順，長与専斉，後藤新平らである．松本は大磯海水浴場の創始者であり，花形役者を大磯に招き，黙阿弥に海水浴を題材にした脚本を書かせて東京新富座で上演させたりもしている．長与は鎌倉海水浴場の開設者であり，後藤は知多半島の大野（現愛知県常滑市）に海水浴場を開いている．

一方，大阪鎮台兵士の脚気治療を目的とした須磨海水浴場の開設には，オランダ人医師ハイデンの指導があった．また片瀬海岸に海水浴場としての適性を認めたのは，政府高官の依頼に応えたドイツ人医師ベルツであった．このように，海水浴場の成立にはお雇外国人らの貢献もあった．

３）外国人による温浴批判

金沢藩のお雇オランダ人医師スロイスが，日本人青年の体力の弱さや女性の貧血症などの原因は温浴（入湯のこと．欧米では冷水シャワーが一般的であった）にあるとし，「旧習を改めるために各所に冷浴場を設けるべし，しかし金沢藩は海に近いので海水浴場を設置するのがよい」と献策した．これを1872

年に『日新真事誌』が報じたが，翌年の『新聞雑誌120号』には湯屋仲間宛に熱湯禁止を伝える東京府の布達も掲載されている．また1877年の読売新聞には東京烏森の冷水シャワーの記事が見え（中山泰昌，1958），1912年発行の『健康増進法』においては「人によって冷水摩擦を行ふが（中略）更に往々にして冷水の中へ這入ると云ふ方法を採って居る人もある．井上馨侯は其実行者の一人である」などと記し，衛生と修養の両面からその効果を説いている．こうして冷水浴は奨励され，流布していった．

外国人による温浴批判が冷水浴の奨励となり，海水浴の普及に手を貸したことも考えられる．

4）在留欧米人によるデモンストレーション効果

留欧米人の海水浴に関する記事の初出は，横浜の英字紙『ヘラルド』1865年7月8日号に掲載されたフランス波止場沖での海水浴ボート設置の広告のようである（第1表参照）．外国人が楽しんでいる海水浴を周囲の日本人が見逃すはずもなく，そのPR効果は大きかったと思われる．しかしその効果が顕著に現れるのは1882年頃のようで，内務省衛生局による「海水浴説」公表の時期とも符合している．

5）海水浴に類似の生活文化的行動

以上のような外からの働きかけとは別に，日本人の海あるいは水に関する生活文化的背景（日常の行動や意識，遠い記憶など）にも着目する必要があろう．冒頭で触れた論文で小口は，海水浴という外来の行動様式と，湯治にみられる日本の伝統的価値観との間の共通する部分が，日本人の海水浴の受容を促進したのではないかとし，特に海水浴における海水温浴（温めた海水に入る）法の存在に着目している．同様のことはさらに幅広い海水浴に類似した伝統の諸行動にもいえるのではないであろうか．その海水浴に類似した伝統的な行動（労働を除く）として，以下のような行動をあげることができよう．

① 身体の清浄（水浴）
② 宗教上の潔斎（水垢離・潮垢離，御輿の海中渡御など）
③ 潮湯（海水温浴，塩湯・潮湯治ともいう），新温泉（再生温泉，人造温泉，薬湯）
④ 潮湯治（直接海に入るケース，海水冷浴）
⑤ 潮干狩
⑥ 納涼（水辺の行楽，特に滝浴び）
⑦ 水練（本来は武道．体力の増進やスポーツ的感覚で楽しむ．後に水泳競技も登場）
⑧ その他（砂風呂など）

①の身体の清潔は，川の水や海水に浸って行われた水浴のことである．湯をわかして入浴することが一般的でなかった時代やそれが困難な地域ではごく当然のことであったであろう．

②の宗教上の潔斎は儀式に際し，川や海などに身体を浸して清める行為である．かつて伊勢参宮者は事前に五十鈴川や二見浦で身を清めた．また漁村や舟運に関わる集落などで，海や川に縁のある祭神を祭っている神社の祭礼に見られる浜降り・神輿洗いなどと称される海中渡御や水中渡御などにも潔斎の意味があるようである．

③の潮湯（塩湯）は海水を沸かして身を浸すもので，潮湯治ともいわれた．その歴史は古く，現地に赴いて入浴したり，時には遠くの海岸から海水や塩を取り寄せて邸宅内で入浴した記録が平安・鎌倉期の文書などに見られるようである．しかしこれは庶民の潮湯治の話ではない．これが庶民のあいだにどれほど普及し，潮湯治場がどのようなものであったかはまだ把握できていない．東京で潮湯が流行しはじめたのは1889年頃であった．これは海水風呂を設けた割烹旅館風のもので，海水温浴や海水浴と称し，従来の潮湯とは根拠を異にしたものであることを示唆している．この点についてはⅣ章で詳述する．

人工温泉には汲み湯や湯の花による再生温泉，薬草などを使った薬湯，薬品混入による人造温泉がある．明治期の再生温泉は源湯にちなんで有馬温泉や草津温泉などと称し，料理屋をも兼帯した．そして

新温泉と総称して銭湯との違いを強調している．潮湯にはこうした人工温泉としての要素もあったと思われる．東京の再生温泉は1870年頃に登場してまもなく流行期をむかえたが，1889年頃にはその主体が潮湯にかわっている（朝倉治彦・稲村徹元，1995）．

④の潮湯治は海水温浴とは別に直接海に入って養生したもので，天保12年（1841）に著された『尾張名所図会』には現在の愛知県常滑市大野にあった潮湯治場のようすが文章と絵によって記録されている．しかし小口（1985）によれば「この冷たい海中に身を浸す潮湯治は，大野だけの特異な習俗であった」ということである．

⑤の潮干狩は旧暦３月３日の磯遊びのことで，沖縄の磯降りという宗教行事が都会風にレクリエーション化したものという（若月紫蘭，1911）．当日は１年のうちで最大の大潮となる日で，江戸にも深川の洲崎や芝浦，品川などの潮干狩の名所があった．

⑥の納涼には上記のような行為も含まれようが，他にも船遊びや花火など各種の行楽がある．なかでも注目されるのが滝浴びで，自然の滝のみならず社寺の境内や屋敷跡，料亭の中庭や浴場などに人工の滝を設けて楽しんだ．滝浴びは宗教上の滝行の模倣であり，また欧米式冷水シャワーをまねたものともみえる．現に1875年の『郵便報知新聞』には滝と温泉の大流行を伝える記事があり，なかに「宝玉楼と云へる新浴は，西洋模擬の浴室にて側に一条の飛泉あり，号して袖摺の滝と称す」との一節がある（中山泰昌，1958）．この滝浴びは1903年にも大繁昌と報じられたが，1925年頃にはすでに海水浴や温泉に客を奪われて衰退していた（田山花袋，1925）．

⑦の水練は江戸初期から武芸の一部として行われるようになった水泳のことである．隅田川筋の水練場が維新後間もなく市民を対象にして復活した．いわゆる水泳教室であるが，納涼目的で参加した者も少なくないと思われる．水泳が盛んになった契機については，日清戦争時に川を泳ぎ渡って敵の舟を奪って帰った兵士の活躍が錦絵や幻灯で紹介されてからであるとする説（木村毅，1978）や，海水浴の流行とともに遊泳熱が起こったとする説（日本体育協会，1970）がある．

1873年，東京向島の隅田川で，時計計時による初の速泳測定が行われた（木村毅，1978）．この所用時間を競う競泳は競技条件の公平を期して後に会場を専用の水泳プールに移すが，それ以前は，1897年に開かれたわが国初の国際競泳会のように，海水浴と同じ海面をも利用した．なお，わが国初の水泳プールは，1919年に大阪茨木中学校に設けられた屋外プールであった（日本体育協会，1970）．

⑧その他（砂風呂など）．砂風呂は海浜の砂を屋内に持ち込んで海水を含ませ，下から温めて利用したものである．東京の大井海岸では1908年に初めてこれが登場し，1922年頃には新規開業が規制されている（大森区役所，1939）．海水浴論のなかには砂浜の効用に言及しているものがあるが，大井海岸の場合は別府の砂風呂をモデルにしたもののようで，新温泉の一形態ともいえそうである．こうした海水浴に類似した行動は他にもあるであろう．

以上が日本人の水に親しむ伝統的な行動や，海水浴に類似した行為の概略である．これらに関する潜在的な意識が，外国人が楽しんでいるという海水浴に関する情報に触発されて活発化し，海水浴の普及に貢献したものと思われる．その際，水練や顕著な流行をみた再生温泉・潮湯・滝浴びなどが，海水浴を実体験するまでの過渡的な行為，あるいは疑似的な体験の場ともなったのではないであろうか．

６）学校教育への導入や事業化への努力

以上のほかに教育現場が保健・体育上の目的をもって，良好な海浜環境を利用するようになったことも，わが国の海水浴場の普及に貢献した．例えば学習院は，1880年に隅田川に設けた水泳訓練所を1891年に湘南の片瀬海岸に移転したが，これが片瀬海水浴場の創始ともなった（藤沢市観光協会，1986）．

また海水浴場が営利事業の一環として開設されるようになったことの影響も大きい．東京南郊の大森海水浴場は1891年頃に創設されたが，1909年になると京浜電車（現京浜急行）が乗客獲得を目的に新聞社と提携して直営の海の家を開業し，その発展におおいに貢献している（大森区役所，1939）．

潮干狩とは逆に，満ちている海水中や日差しの強い夏の海浜を行楽の場として求める今日的な海水浴は，日本人の伝統的な行楽としては一般的ではなかったが，それに類似した行動は少なくなかった．それだけに目の前で楽しそうに泳ぐ欧米人の姿は，夏の暑さに悩まされ続けてきた日本人の心を引きつけたことであろう．保健・衛生上の目的にしろ，スポーツ・行楽上の楽しみにしろ，こうした刺激によって海あるいは水にかかわる伝統的な諸行動や意識などが触発され，新趣向としての海水浴の普及を容易にしたと考えてもよいように思われる．

また今日の行楽のありようを考えると，このような海水浴の普及過程は，海水浴の伝来によって起こった親水性の行楽の変容過程の一端を示すものともいえそうである．

Ⅳ　東京－大磯間の海水浴場に関する一考察

1．海水浴場史的にみた特長

当該地域は東京都心からおよそ60㎞に及ぶ臨海地帯で，主として内湾の東京湾沿岸地域と外洋に面した相模湾沿岸地域（三浦半島先端部を含む）に分けることができる．前者はわが国の近代史においてその中心的位置を占め，都市化・工業化の面でもっとも激しく変化した地域であり，海岸線の変貌はことに著しい．一方後者はその外縁にあって都市化がはげしいとはいえなお田園的な性格を保つ地域であり，海岸の状況も前者にくらべればはるかに変化が少ない．このような地域の海水浴場の成立について，海水浴場史的に概観すると以下のようになる．

わが国の海水浴の普及に多大の影響を及ぼした在留欧米人の生活の場は，主として横浜，神戸などの外国人居留地であった．なかでも中心的な役割を担ったのが横浜で，外交・貿易等の実務面ばかりでなく，設備の整った休養地でもあった．それだけに居留地内で行われたレクリエーションの数々が日本人の行楽に及ぼした影響は大きく，海水浴もその一端に連なると思われる．この横浜居留外国人が楽しんだ海水浴場は，フランス波止場沖から本牧・富岡などにいたる海岸であった．

一方東京（江戸）は，江戸開幕によってわが国の代表的な政治都市となり，幕末には100万ともいわれる人口規模を誇る大都市となった．したがって幕末～明治期の江戸あるいは東京はわが国最大の行楽市場であったといってよく，横浜で欧米人が楽しんでいるという海水浴に関する情報も届いていた．しかしこうした状況ではあっても，政府の大官が海水浴場を開いたのは，鎌倉や東京から50㎞以上も離れた相模湾沿岸（湘南）の大磯の海浜であった．

1887年に官営鉄道の横浜－国府津間が開通し，1889年には大船－横須賀間も全通した．横浜から馬車や人力車に頼っていた湘南の交通事情は，これによって画期的な改善をみた．この結果，東京在住の富裕階級や，暑中休暇を享受しえた官員，時間に拘束されることの少ない文人・墨客などが，療養や保養・避寒などとともに海水浴をも目的としてこの地を訪れるようになり，海水浴場の開設が相次いだ．そして，その趨勢は東京湾と湘南を境する三浦半島の先端にも及んだ．

旅行にかかる時間的・経済的負担は，圧倒的多数を占める東京の庶民には重かった．その庶民がごく身近な環境のなかに求めたのが芝浦や品川・大森・新子安などの京浜間の海水浴場である．しかしこの地域は都市河川の流れ込む内海で，地形のみならず海水や海底の地質も良好とはいえなかった．

また，都心に近い芝浦には一般の海水浴場とは趣を

異にした海水温浴主体の海水浴場ができ，一時期おおいに繁昌した．この点については後述する．

第１図は明治期における東京－湘南間の主な海水浴場の分布を示したものである．同図は主として1907年および1910年発行の２種類のガイドブックによって作成したものであるが，当該地域の著名な海水浴場はおおむね名を連ねている．しかし年代等の枠をとりはらうと，第１表に見える山下などの横浜の海水浴場のほか，大正期以降に成立し，あるいは活況を呈して，後に大規模な港湾や空港・工業用地等の造成によって姿を消した砂町・月島・大井・森崎・穴守（羽田）・大島・扇島・新子安・その他の多くの埋もれた海水浴場が加わって，数の特定さえ困難な状態となる．

第１図　明治期の東京・湘南間における主な海水浴場の分布
資料：『避暑博覧会』，『日本転地療養誌』，『横浜もののはじめ考』より作成

２．海水温浴保養地としての東京芝浦海岸

前述のとおり，芝浦海岸には通常の海水浴場とは質を異にした海水温浴主体の海水浴場が繁昌した時期があった．1907年発行の『避暑博覧会』に収録されている「必携・全国避暑地便覧」は，全国の温泉地・海水浴場を紹介するなかで「芝浦海水温浴」をあげている．便覧は地名・交通・旅館・付近の名勝古跡・特効・名物の項からなる表形式である．したがってこの芝浦海水温浴は，一帯が海水温浴施設の整った保養向きの地域であることを意味している．

この海水温浴について『明治事物起源』は，「明治十五年夏，東京芝，新浜町に，海水温浴場を始めし者あり，東京海水温浴の祖なり」，「十七年には，（中略）伊勢二見浦のほとりへ，海水浴場料理屋旅館も備はりて七月中に開業，従来塩湯と称し来れるものも，皆海水浴の新名を称せり」と記す（石井研堂，1944）．したがってこの海水温浴はⅢ章で触れた東京の潮湯の一つであり，海水浴場料理屋旅館は海水温浴場のある割烹旅館の意味あいのものである．

明治15（1882）年は「海水浴説」公表の翌年である．同説は海水浴に冷浴と温浴の２つの形態があることを述べているが，それらを具備したもっとも素朴な海水浴場の姿を伝えているのが『二見町史』の二見浦海水浴場創設についての記述である．同海水浴場の創設もまた1882年のことで，当初は「立石の海中に多くの杭を立て，危険防止のため縄を張り，海水浴場を標示した．これが冷浴とよぶもの．一方の温浴設備は，当時は興玉神社社務所の東手に駕篭立松という大松があり，その下に，男女別で浴槽４個を設け」たものであった（二見町，1988）．

発足直後の芝浦の海水温浴施設が屋内にあったかどうは不明であるが，当初屋外にあった二見浦の温浴施設が屋内へ移されたのが明治17（1884）年であることからみて，屋内海水温浴施設や海水浴場料理屋旅館の誕生は芝浦のほうが早かった可能性もある．

1902年１月の風俗画報臨時増刊『新撰東京名所図会・

第三十三編』の酒楼の項には「大の家　金杉新浜町９番地　料理店／見晴亭　同12番地　割烹店／芝浦海水浴　同１番地　温泉及旅館／松金　金杉４丁目15番地　鰻屋／大光館　本芝１丁目32番地　料理店／芝浦館　同　鉱泉浴場及料理店／…」との記述があり，この芝浦海水浴が明治15年創業の海水温浴施設であると思われる（下線は著者）．また同図会・本芝の景況には「入間川の落ち口には，大光館，芝浦館等の料理海水浴場ありて…」と見え，海水温浴場を備えた料理屋等が複数存在したことを伝えている．入間川は入会川とも表記された堀川で，江戸期以来，市街の下水を集めて芝浦に流れ込んでいたが，関東大震災後に埋め立てられた．

以上のようなことから江戸の景勝地芝浦は，明治期に入って間もなく，新説の海水浴論を根拠としたわが国初の屋内海水温浴施設やそれを備えた割烹旅館風の海水浴場料理屋旅館の発祥地の一つとなり，1900年頃にはそれらが建ち並ぶ保養地として繁昌したということがいえそうである．

いつからかは不明であるが芝浦でも水泳（海水冷浴）が行われていた．それにもかかわらず便覧が海水温浴だけを紹介する理由は，その海域が入間川の河口に近く，海水が清浄ではなかったことにあったのではないかと思われる．

この海水温浴保養地は1908年から始まった港湾建設のため姿を消した．しかし，新たに造成された港の構内や堀割では国際水泳大会が開かれており，水泳プールが普及するまで市民の水泳場となっていたようである．東京府内の50mプールは1922年の創設であったが，翌年には芝公園内にも同様のプールが設けられた（東京都港区三田図書館，1976）．

V　むすび

わが国における海水浴の普及および海水浴場の成立の契機は，幕末～明治期における保健衛生上の問題と，欧米文化の伝来のなかに求めることができ，①西洋医の強い関心，②保健目的での導入努力と奨励，③外国人による温浴批判，④在留欧米人によるデモンストレーション効果，⑤海水浴に類似の生活文化的行動，⑥学校教育への導入や事業化などがその推進力となったとみることができる．

一方，東京から大磯にいたる海浜には外国人が開設したわが国初の海水浴場や，衛生思想にもとづいて政府の大官が開設した海水浴場，鉄道開通に端を発した海浜保養地化の進展のもとに成立した海水浴場，東京市民の身近な海浜に営まれた海水浴場のほか，海水温浴を主体とした海水浴場などが成立した経緯があり，わが国の海水浴場の成立とその背景を考察するうえで興味ある地域の一つといえる．

しかし当該地域に成立した海水浴場はその数さえ明確ではない．それだけに埋もれた海水浴場やそれにかかわる諸事項をどれほど具体的に掘り起こすことができるかが今後の課題である．

（受付　2001年１月22日）
（受理　2001年３月19日）

文　献

朝倉治彦・稲村徹元（1995）：『新装版明治世相編年辞典』東京堂出版，694P.
石井研堂（1944）：『改定増補・明治事物起源・上下巻』春陽堂，1538P.
糸左近（1912）：『健康増進法』博文館，276P.
大磯町観光課（1984）：『磯のかおり』，95P.
大森区役所（1939）：『大森区史』，1161P.
小口千明（1985）：日本における海水浴の受容と明治期の海水浴．人文地理，**37**-３，23-37.
木村毅（1978）：『日本スポーツ文化史』ベースボール・マガジン社，294P.
久米邦武編修（1878）：『米欧回覧実記・二』岩波文庫，435P.
全国公衆浴場環境衛生同業組合連合会（1972）：『公衆浴場史』，549P.

REGIONAL STUDIES Vol.41 No. 2 pp.14～22
2001－3 ISSN 0389-6641

田山花袋（1925）：『東京近郊・一日の行楽』（4版）博文館，692P.
大日本名所図会刊行会（1919）：『尾張名所図会・中巻』，184P
東京都港区三田図書館（1976）：『港区歳時記・二』，181P
中山泰昌（1958）：『新聞集成明治編年史（再版）第1巻』財政経済学会，522P.『同第2巻』，578P.『同第4巻』，515P.
長尾藻城（1910）：『日本転地療養誌』吐鳳堂書店，662P.
㈶日本体育協会（1970）：『日本スポーツ百年』，851P.
博文館（1907）：『避暑博覧会』（写真画報臨時増刊第2巻第9編），80P.
藤沢観光協会（1986）：『江の島海水浴場』，95P.
二見町（1988）：『二見町史』，1205P.
宮尾しげを監修（1969）：『東京名所図会・芝区之部』睦書房，220P.
宮永　孝（1997）：『白い崖の国をたずねて』集英社，285P.
村松剛（1990）：『醒めた炎・三』中公文庫，516P.
安島博幸・十代田朗（1991）：『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局，307P.
山田登世子（1998）：『リゾート世紀末』築摩書房，350P.
横浜開港資料館（1988）：『横浜もののはじめ考』，188P.
横浜市（1979）：市民グラフ『ヨコハマ』No.31，72P.
若月柴蘭（1911）：『東京年中行事・一』平凡社，288P.
アラン・コルバン著，福井和美訳（1992）：『浜辺の誕生』藤原書店，752P.
トク・ベルツ編，菅沼竜太郎訳（1979）：改訳『ベルツの日記・上』岩波文庫，374P.

A Study of Bathing Resorts in the Meiji era

Masaki Nakayama

［keywords］1 sea bathing　2 bathing resort　3 Meiji era　4 Keihin area　5 coast of Shonan